様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１１７０６

研究課題名（和文）発達障がい看護の実態調査および看護職への支援に関する混合研究

研究課題名（英文）Study on Current Situation in Nursing for Patients with Developmental Disorders and Support for Nurses: Mixed Methods Research

研究代表者
辻野　久美子（Tsujino, Kumiko）

琉球大学・医学部・教授

研究者番号：６０２６９１５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：沖縄県内の病院診療所に勤務する看護職者3,718名への質問紙調査の結果、発達障がい児者とかかわった経験のある者は半数近くもおり、さらに、発達障がいに対する看護職者の知識は十分ではないこと、適切な看護が十分には行われていない実態が明らかになった。
看護師19名に実施した質的研究の結果、発達障がい児への看護師の対応プロセスには３通りあり、その中で看護師の対応が【上手くいく】ためには、看護師自身の内省（リフレクション）と施設のサポート体制が重要であることが示唆された。この結果は量的研究結果で指摘された「不適切な対応」への対処法を検討する際に重要となる。

研究成果の概要（英文）： According to our survey administered to 3,718 nurses working in hospitals or private clinics in Okinawa, half of nurses surveyed had experiences involving care for patients with Developmental Disorders(DD).In addition,results from our study clearly indicate that in reality, nurses have insufficient knowledge regarding patients with DD,and are not always capable of providing adequate nursing care.
Our qualitative research,interviews conducted with 19 nurses,identified three processes regarding how nurses approach children with DD and indicated that among those,‘self-reflection’and support system in their work place are essential to nurses aiming toward【smooth and successful】interactions with their patients.These results may be important to addressing the problems with ‘inadequate support’identified in our quantitative survey.

研究分野：小児看護学、遺伝看護学

キーワード：発達障がい　看護　量的研究　質的研究　混合研究　母親　ペアレントトレーニング

１．研究開始当初の背景

「発達障害者支援法」が施行されてから 10 年が経過しようとしているが、その間に、発達障害（以下、発達障がいとする）のある人を取り巻く教育・福祉環境は少しずつ整備が進められている（日本子ども家庭総合研究所 2013、同 2009）。一方、医療環境については先行研究が少なく、その実態は明らかでないが、発達障がい児・者が医療機関を受診する時の辛い状況については、いくつか報告がある（小川 2010、大屋他 2008、書上他 2007、小室他 2005）。その中で共通して指摘されていることは、「発達障がい特性に対する医療職・看護職の知識不足、理解不足」であり、そのために発達障がい児（者）は、配慮のある十分な診療が受けられず、受診行動は患児（者）・家族にとって大きなストレスになっている（小川 2010、大屋他 2008）。

発達障がいが理解されにくい原因には発達障がいの特性が挙げられるであろう。例えば自閉症の特徴がコミュニケーション・社会性・想像力の障がいであるように、発達障がいは脳機能の障がいであり、身体的または知的障がいに比べると、一目見ただけでは分かりにくい。さらに障がいの状態像が複雑で、個別性が大きいことから、家族や支援者も対応に苦慮することがあり、そのために誤解され、周囲のサポートが得られにくい状況に陥りやすい（厚生労働省 2008）。しかし、暴れる、検査できない、触らせない、本人の訴えがわからないなどといった問題行動にも、必ず本人なりの理由がある（小川 2010、大屋他 2008）。発達障がいを理解するための教育が医療職には必要であるが、医療の基礎教育において、そのような機会は十分には用意されておらず（小川 2010）、卒後の自発的な学習に頼らざるを得ないのが現状である。

ところで、上述した先行研究においては、家族の視点から医療の実態を分析し、家族の困難な状況やニーズを明らかにしている。一方で、指摘を受けている側の医療職の困難感や医療の実態については情報が少ない。そこで申請者らは、看護職を対象にした発達障がい看護の実態調査に着手した。第一段階として、沖縄県内で小児科を併設する病院・診療所で協力の得られた 82 施設の看護職 2,726 名に質問紙調査を実施し、分析の終わった 728 名について第一報として報告した（上間、辻野他 2014）。結果は先行研究を裏付けるように、発達障がいに対する看護職の知識は低かったが（23 点満点中平均 6.2 点）、発達障がい児（者）と関わった経験がある者は約半数で、申請者らの予想を超えていた。対応に困難を感じたことのある者は約 4 割、無いものは１割、残りの半数は無回答であった。困難を感じた場面は看護ケア時、指導時、処置時の順に多く、その場面で「好ましい対応」をしていた者は約 3 割、「好ましくない対応」は約 2 割であった。結論として、発達障害児・者に対する看護においては、知識の啓発と共に、発達障がい児（者）の個別性に合わせた対応方法について事例検討を行い、臨床にフィードバックできる方法を検討する必要性が示唆された。今後は第一段階の結果を考察し、さらに第二段階の実態調査を行う。

２．研究の目的

発達障がい児・者が医療機関を受診する際には、様々な困難があることが報告されており、本人や家族にとって大きなストレスになっている。その原因は患児（者）側の障がい特性によるものが大きいが、医療職の対応に問題があることも、家族によって指摘されている。発達障がい児・者が安心して医療を受けるためには、障がいに対する医療職の理解が不可欠であるが、医療職の実態について、医療職を対象にした研究は僅かである。そのため、本研究では看護職を対象に、混合研究の手法を用いて発達障がい児・者への看護の実態を明らかにし、看護職側の困難感と対応方法について分析する。さらに、母親の心情を質的に分析し、有効な育児支援について検討する。

３．研究の方法

沖縄県内の全医療施設（既に調査した施設を除く）の看護職にアンケート調査を実施し、全施設の実態を明らかにする。調査内容は、基本属性、発達障がい児・者とかかわった経験、対応で困難を感じた場面、対応方法、発達障がいに関する知識・意識についてである。量的研究に続いて質的研究を実施し、量的研究結果を補完する。看護職へインタビューを行い、発達障がい看護における困難感や対応について詳細に聞き取り、修正版グラウンデッドセオリー・アプローチ（以下、M-GTA）の手法を用いて質的帰納的に分析する。さらに母親へのインタビューも実施し、三者の結果を比較検討することにより、看護職が発達障がいを理解し、好ましい対応が出来るような支援方法について考察する。最終年度には母親を対象にペアレントトレーニング（以下、PT）を企画実践し、母親支援に役立てる。

４．研究成果

沖縄県内の病院診療所で協力の得られた 203 施設の看護職者 3,718 名に質問紙調査を実施し、看護の実態を分析した。発達障がい児者とかかわった経験のある者は半数近くもおり、さらに、先行研究の結果と同様に、発達障がいに対する看護職者の知識は十分ではないことが明らかになり、同時に、適切な看護が十分には行われていない実態も浮上した。

質的研究については、県内の看護師 19 名にフォーカスグループインタビューを実施し、M-GTA により分析した。その結果、発達障がい児への対応方法がわからず葛藤している看護師の対応プロセスには３通りあることが明らかになった。１つ目は葛藤しながら【やむを得ぬ身体抑制】を行うが、自身の看護について内省し、施設（医師や先輩等）のサポートを受けながら、児の発達特性に配慮した対応方法に気づき、最終的には【上手くいく】プロセス、２つ目は【やむを得ぬ身体抑制】を経て他の対応も試みるが、答えが見いだせずそのまま【先へ進まない】プロセス、３つ目は【やむを得ぬ身体抑制】は行わないが、親の気持ちを考えるために児の対応に踏み出せない、発達障がいが疑われる親の言動がストッパーとなるなど、【先へ進まない】プロセスである。このように、看護師の対応が【上手くいく】ためには看護師自身の看護に対する内省と施設側のサポート体制の重要性が示唆された。この結果は量的研究結果で指摘された「不適切な対応」への対処法を検討する際に有効である。

最終年度は母親を対象に質的研究を実施した。対象はペアレントトレーニング（以下、PT）を経験した母親 14 名で、インタビュー結果を M-GTA を用いて分析した。母親は子育てに自信が持てない状況においてわが子の行動が理解できず苦しんでいたが、PT に参加したことにより、【ありのままの自分を受け

入れる】ことが出来るようになり、そのプロセスを経て児への見方も変化し、児に向き合うことが出来るようになった。このように、PT の成果が検証され、新たに母親４名のグループに 1 回 90 分の PT を、隔週で計 11 回実施した。さらに、質的研究（M-GTA）に関する講演会・勉強会を全県規模で開催した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（他 5 件（計 9 件））
①Yoko Tamashiro, yumiko Endo, Takehiko Toyosato, Takao Yokota, Fujiko Omine, Kumiko Tsujino, Physiological and nutritional intake characteristics of pregnant women according to recommended gestational weight gain in relation to the birth weight of their full-term infants, Ryukyu Med. J, Vol.37, 2018、査読有、掲載予定

②沓脱　小枝子、辻野　久美子、村上　京子、飯田　加寿子、遠藤　由美子、プラダーウィリー症候群のある児とその家族への乳児期の看護、日本遺伝看護学会誌、Vol.15 (2)、57-67、2017、査読有

③Murakami k, Turale S, Skirton H, Doris F, Tsujino K, Ito M, Kutsunugi S, Experiences regarding maternal age-specific risks and prenatal testing of women of advanced maternal age in Japan, Vol.18, 8-14, 2016, 査読有

④Tsugiko Gima, Risa Shikenbaru, Kumiko Tsujino, et al , Characteristic Features of sleeping habits of 3-year-old infants in Okinawa, Japan, Ryukyu Med J, Vol.33, 17-28, 2015, 査読有

〔学会発表〕（他 22 件（計 28 件））
①鈴木　ミナ子、仲地　亜子、新垣　莉奈、玉那覇　寿々子、平安　良次、比嘉　真也、辻野　久美子、ペアレント・トレーニングを通して母親が変化するプロセス、日本心理教育・家族教室ネットワーク第 21 回研究集会沖縄大会、2018 年 2 月 24 日、沖縄県男女共同参画センターてぃるる、沖縄県那覇市

②Tsugiko Gima, Kumiko Tsujino, Fujiko Omine, Yumiko Endo, Yoko Tamashiro and Manami Uehara, Comparison of Characteristics of Sleep Patterns Among 3-year-old Children in Five Cities in Okinawa, Japan, TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017, 10/22nd, 2017, Miracle Grand Convention Hotel, Bangkok, Thailand

③辻野　久美子、儀間　繼子、鈴木　ミナ子、大嶺　ふじ子、遠藤　由美子、玉城　陽子、自閉症スペクトラム障がい者の就労継続における母親のかかわり、第 36 回日本看護科学学会学術集会、2016 年 12 月 11 日、東京国際フォーラム、東京都千代田区

④竹内　久美子、村上　京子、辻野　久美子、先天異常が確定するまでの時期の看護ケアに対するダウン症候群のある児の母親のニーズ、日本新生児看護学会、2016 年 12 月 2 日、大阪国際会議場、大阪府大阪市

⑤鈴木　ミナ子、辻野　久美子、儀間　繼子、大城　ほとり、親富祖　彰、狩野　萌子、発達障がいに対する看護師の意識および看護上の対応困難経験の関連、第 35 回看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 6 日、広島国際会議場、広島県広島市

⑥大城　ほとり、辻野　久美子、儀間　繼子、鈴木　ミナ子、親富祖　彰、狩野　萌子、看護師による発達障がい児への対応プロセス、第 35 回看護科学学会学術集会、2015 年 12 月 6 日、広島国際会議場、広島県広島市

〔図書〕（計　2　件）
①白木　和夫、高田　哲編集、執筆 60 名、（分担執筆）辻野　久美子、ナースとコメディカルのための小児科学改訂第 5 版、「先天的な問題を持つ子どもと家族」（P110-113）、総頁 419 頁、日本小児医事出版社 2016 年

②白木　和夫、高田　哲編集、執筆 60 名、（分担執筆）辻野　久美子、ナースとコメディカルのための小児科学改訂第 6 版、「先天的な問題を持つ子どもと家族」（P110-115）、総頁 426 頁、日本小児医事出版社 2018 年 2 月

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
辻野　久美子（Tsujino Kumiko）
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：60269157

(2)研究分担者
村上　京子（Kyoko Murakami）
山口大学・大学院医学研究科・教授
研究者番号：10294662

大嶺　ふじ子（Omine Fujiko）
琉球大学・医学部・教授
研究者番号：40295308

沓脱　小枝子（Kutsunugi Saeko）
山口大学・大学院医学研究科・助教
研究者番号：50513785

儀間　繼子（Gima Tsugiko）
琉球大学・医学部・助教
研究者番号：80315473

(3)連携研究者 なし
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
鈴木　ミナ子（Suzuki Minako）
上間　藤那（Uema Fujina）
大城　ほとり（Oshiro Hotori）
親富祖　彰（Oyahuso Aki）
狩野　萌子（Kano Moeko）
玉城　愛（Tamaki Ai）
林　千菜美（Hayashi Tinami）
大嶺　優花（Omine yuka）
粟國　ゆりか（Aguni Yurika）
宮城　綾子（Miyagi Ayako）
上江洲　藍子（Uezu Aiko）
真栄平　志保（Mehara shiho）